せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第八十九号（毎月一日発行）
平成九年二月一日

北海の鰊場 古平風土物語（五六）

陸の孤島にフォード車が走る

高橋源吾

■小樽・余市のニュース

同級生の海田綱市君は、生家が牧場経営をしていた関係で、高等科に上がった頃から自家で育成した肉牛の出荷を手伝っていた。この牛を追って美国、古平から余市山道を越えて余市に出て、そこからなお小樽市長橋にある屠殺場まで、一日行程で約四十五キロ余りの強行軍をしていたのである。

そして二、三日後に帰って来ると教室で、余市や小樽で見聞したおもしろいことや珍しいこと、また活動写真（映画）で人気のあった尾上松五郎の忍術映画や、チャップリンのこっけいな映画のことなどを話して聞かせる。まさに文化的なニュースの伝達屋？　でもあった。

彼を囲んでは、これを聞くのがクラスのみんなの楽しみのひとつであった。

■余市山道をフォードが走る

昭和三年の夏から、改修された余市山道を小型自動車が往復した。これは余市町鈴木自動車部が運行したもので、車は中古の幌付きで、四、五人乗りのフォード車であった。古平ー余市間を片道一時間半くらいで定期運行し、一日三往復した。

多少の改修はしたものの、山道は狭い上に急坂や急カーブが多かったので、乗客の多くは肝を冷やして、船酔いならぬ車酔いで苦しんでいる人もいた。危険を避けて、激しい雨の日などは運休していた。運行期間は雪が消える五月中旬から、雪の降り出す十月下旬までであった。

昭和五年頃になって、余市漁港（船入澗）が竣工した。続いて同八年には古平漁港、同十五年頃には美国漁港が竣工した。いずれも最初は小規模の漁港ではあったが定期船が接岸できるようになり、船の乗降客にとっては大変便利になった。

こうして、積丹半島の交通が不自由ながらも、次第に住民の足として整えられてきた。こうして地域の産業、経済の開発、文化交流に明るい光が見えはじめてきたのであった。

その後、山道も自動車道路としての改修工事が進められ、昭和十五年頃から小型バスが運行されるようになった。バスの所要時間も、余市ー古平間が一時間程になった。

♣海水が凍ること

曹谷（宗谷）会所の前から岬を越え、海上三里（十二キロ）程の海辺を通り、さらに陸を廻って行くと入江になっている所がある。ここは寒に入る以前から氷が張る。一寸（約三センチ）から二寸くらいで、岸の方では一尺にもなるが、立春が過ぎるまではヤマセ（東の風）が吹くと、唐太島（サハリン）の方から山のように氷が押し寄せてくる。そうなるとレブンシリ（礼文）の方まで一面の氷山のようになる。そんな時、氷上にオットセイが乗っているが、それを見てアイヌの人たちはオットセイの猟をする。

ある年の春のこと。付近のアイヌの人たち三百人程が猟に出た時、急にヒカタ（南西の風）が吹いてきて氷が岸を離れ、強風と共に波も高くなり、小舟が波や氷に打たれて猟に出た者は一人残らず死んでしまったという。

←（次ページ下段へ続く）

ざわと世間のアイヌ［こしばな集］

―百年の歴史を閉じる―
稲倉石鉱山〈10〉

■空襲による死者と埋葬

空襲による死者の数は二十一人が確認された。死者を埋葬するにも火葬場が間にあわず、夏の季節でもあり腐敗が進むことから、禅源寺裏手のくぼ地（現在は土を盛り墓地になっている）で火葬をした。

ここで火葬したのは五人で、戦地で実際にその経験のある在郷軍人分会の人たちが行なったが、近くの古平小学校（現在の文化会館の所）でもその臭いがしたそうで、また、小学生が好奇心から休み時間に火葬の現場を見に行って、先生に叱られた者もいたという。

この空襲で行方不明の者が二人いたというが、昭和二十八年と同三十年に、沈没した射水丸を解体処理した時に遺骨を発見し引き上げ、無縁塔に埋葬したがその氏名は分かっていない。

■戦後の混乱期

敗戦により国土が荒れ、それに加えて食糧難・物価の高騰などで国民生活は困難を極めたが、幸いなことに、鉄興社は工場の被害は少なかった。

当時、日本一の生産量を誇っていた稲倉石鉱山も、それまでの需要がとぎれたため生産を中止し、規模も縮小しなければならない状況となった。

朝鮮から徴用されて来た従業員は帰国し、臨時従業員を整理し、僅かに七十三人が残って施設や設備の保全に当たった。

会社は従業員の生活を守るため、坑内施設や出戸の沢選鉱場の機械、社宅などを売却したり、利用出来る設備で自家製塩や石けんの製造などを行なった。

■復興により生産再開

昭和二十二年頃から、主力製品であったフェロアロイの需要が再び伸び、八月からその生産を再開することになった。しかし、坑内のレールや排水ポンプは終戦時に取り外していて、必要資材の調達も難しく、鉱夫も二十人足らずで復旧作業は遅々として進まなかった。

終戦前まで、元山その他各所に貯蔵してあった鉱石約一万四千トンをまず搬出した。この鉱石は港町の鉱石専用埠頭から積み出され、酒田市の大浜工場をはじめ、八幡・輪西・釜石の各製鉄所へ出荷し、鉱山は久し振りに活気を取り戻した。

昭和二十三年、好況の波に乗り最盛期に迫る月産二千トンの採掘計画をたて、坑内外の施設の補修につとめ、翌二十四年六月にはその計画を達成できるまでに復旧した。

■朝鮮動乱で需要が激増

昭和二十五年六月、朝鮮動乱が始まるとフェロアロイの需要が激増した。この需要に応じるため昭和二十六年、重液選鉱場を新設すると共に中央立坑、坑道などの整備を進め、七月にはさらに月産二千五百トンの計画を立てた。

しかし昭和二十八年、朝鮮動乱が集結するとたちまちマンガンは生産過剰となり、価格も低落したが、新グリナワルト炉焼結設備の完成により、この経営危機を克服した。

この研究改良された新しい炉を使用することで、ばい焼のコストダウンと鉱石の品位が向上し、これにより利益の増大を図ることができた。

新グリナワルト炉

グリナワルト炉はアメリカのグリナワルトが発明したもので、銅・鉄鉱山では広く使用されていたが、それをマンガン鉱にも利用できるように改良し、新グリナワルト炉が完成した。

その方法は、炉の中にコークスと鉱石を混合して入れ重油で焼くのだが、これにより安価で大量のばい焼が可能になったばかりでなく、マンガン鉱の品位も向上したのである。

（前ページより）

もっともオットセイを獲りに行く時は、舟には食糧や薪、水なども用意をして行く。目的地に着くと氷上に舟を引き上げ、そこに小屋をかけて仮の住居とし、オットセイを見れば矢を放って狩猟をするが、時には獲物に近づき、ヤスという道具を使って突き刺すこともある。

職業の移り変りと町治要覧から（明治43年と昭和2年）

昔は職人というか、手に職を持った人たちが一家を構えて生活することが多く、その技術をみがきながら職人としての誇りを持って生きていました。

古平町にはどのような職業の人たちが、何人（何戸）いたのか、まとまった詳しい記録はありませんが、おおよそそれをたどることはできます。

〔上段は明治四十三年（一九一〇）、下段は昭和二年（一九二七）〕

職業	明治43年 戸	昭和2年 戸	職業	明治43年 戸	昭和2年 戸
物品販売業	一一八	九四	問屋業	〇	二五
運送業	一七	五	売薬業	三	〇
旅人宿	七	五	時計業	〇	〇
料理店	一二	六	仕立業	〇	一
飲食業	五	三	桶屋	〇	二
理髪業	一八	一一	靴屋	〇	一
湯屋	五	二	かじ屋	〇	五
周旋屋	〇	一	土木請負業	〇	一二
仲立業	四	六	代弁業	二	二
代理店業	〇	三	豆腐屋	〇	五
金銭貸付業	一七	〇	篭屋	〇	一
製造業	三七	*	かっぱ屋	〇	一
代書業	四	二	こうじ屋	〇	六
木挽	一〇	〇	ちょうちん屋	〇	三
大工	三一	三六	表具屋	〇	一
石工	三	四	柾（屋根）屋	〇	三
菓子業	〇	五	牛馬売買業	〇	一
			倉庫業	一	一
写真屋				二	二
ブリキ屋				〇	四
精米業				〇	一
かばん製造業				〇	二
劇場				〇	二
新聞				〇	二
湯屋				四	二
その他				三六	一
計				三七〇戸	一

明治時代からの古平の職業について調べてみましたが、よくわかりません。それは記録が残されていないこと、せっかくの記録も数字にくい違いがあること、また、職業をどのような分け方で調べたのかが定まっていないからです。

古平町治要覧（古平町編）と後志支庁概況（後志支庁編）から調べてみましたが、「医師」の数で古平町治要覧では五人となっていますが、後志支庁概況ではゼロとなっていたり、また別な資料を見ますと、統計が戸数であったり、人数であったりで、いまのところ、年度を追って一覧にすることができないでいます。

限られた資料ではありますが、その職業をみると当時のことが想像できます。

また明治四十三年、古平町の戸数は千三百四十戸、人口七千七百八十二人（男三九八四・女三七九八）、漁業四百九十四戸（三十七％）、農業百八十九戸（十四％）、商工業三百十四戸（二十三％）、その他の職業三百四十三戸（二十六％）となっていますが、漁業関係の多いことが目立っています。農業では専業農家が百八十九戸ですが、兼業が六百五戸もあります。鰊漁期以外には農耕をする家庭が多く、自給自足の生活だったようです。

新生児二百二十五人、死亡百八十人ですが、人口は百四十五人増えています。他府県からの来住者は、十六戸・五十二人おります。

発展する、当時の古平町の状況をうかがい知ることができる数字です。

海宝麺と鮫の田楽

福井 幸平

◆海宝麺のこと

戦前、戦後をはさんで物資はほとんど統制経済で割当の時代だった頃、いかに食糧事情が極限に達したか、今思うとゾッとする。

まず、海宝麺（海草麺かも）のことを書こうと思う。

なにもかも身動きとれぬ食糧難時代に工夫されたカイソウメンは、モゾクのような色で、三0センチ程の海草の一種だそうで、沢江の或る漁師さんに聞いたので間違いない。

もともと漁師は鰊漬の汁に例のカイソウメンを入れて常食したとのことで、これは私の聞いた話である。

私の言うカイホウ麺はうどんの様に加工されたもので、なにを継ぎにしたか（多分デンプンだと思う）分らないが、緑色のつき出しトコロテンの姿であった。腹持ちはあまりよくないが、当時、藪長のおじいちゃんが、稲倉石に出稼ぎに来ていた朝鮮の人たちに商売として売っていたと、末政才治さんが話していた。

仕入先は小樽方面とのことで、統制外品なので違反にはならない。稲倉石に勤めていた人は大たい食べた事もあるし、小樽より買ってた人も幾人がいたようだ。私も何回か食べたことがある。

◆鮫のこと

鮫の田楽（デンガク）を食べたのは、記憶ではもう五十年も前のように思う。

その頃は冷蔵庫㈱に勤めていた。多分、十一月から十二月半ばには古平でも随分と鮫が獲れていて、冷蔵庫はいつも鮫で満庫の状態で、例のアンモニャ臭が漂っていた。

地元の古平ではあまり食べないようだが、青森、即ちつがる衆には何よりの好物で、発送先はきまって青森であったと思う。鮫の卵（魚らん）は別に冷凍して貴重品扱いだった。またヒレはヒレで、これまた東京市場で高価に売れたと思う。

鮫の田楽はくせがないのでおいしく食べられた。

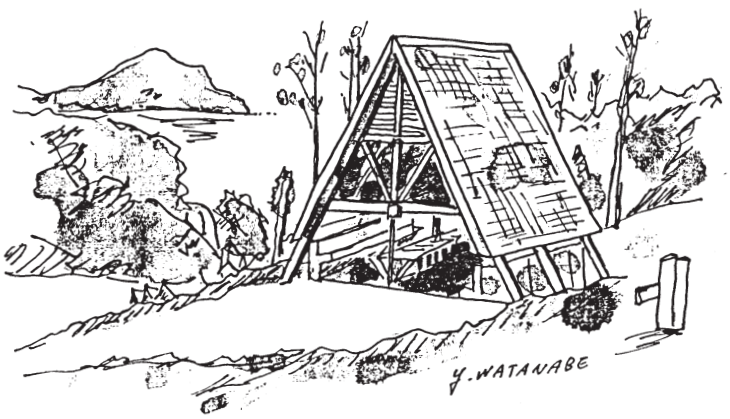
鮫肌とはよくいったもので、あのザラザラした感触は、素手ではとても扱いかねるしろものである。

今の人は、鮫など食べる機会もないかも知れない。

古平町家族旅行村

ふるさとスケッチ

―― 勤労者野外活動施設として
昭和60年7月20日開村 ――



古平美術協会 渡辺嘉之

遥かなる故郷の思い出

『闇屋』の話［中］

〔29〕

橘　義春

私が、昭和二十二の暮れに樺太（サハリン）から復員して来たら、親父は小樽の病院に入院していた。帰還の報告と見舞いをかねて小樽へ行ったとき、駅の横で、老夫婦がお巡さんにリュックの中を調べられていた。

中身は米で、十キぐらいあったようだった。

「これは闇米だから没収する」と言っている。

老夫婦の話だと、金が無いので衣類を余市町の農家へ持って行って、それで米と交換して来たもので、この米を没収されると、これから帰っても食べるものがない。なんとか見逃していただきたいと懇願している。一人息子が兵隊に行って、いまシベリヤに送られている。その息子の帰りを、おかゆをすすってでも待つんだ、と言っていた。

それを聞いたとたんに、頭がカッとあつくなってきた。私もシベリヤから帰って来たばかりで、しかも若かった。怖いもの知らずで、お巡りさんなどクソ食らえだった。

ずかずかと、老夫婦とお巡りさんの間に入って行った。

「お巡りさん、許してやってケネベガ。おじいちゃんとおばぁちゃんかわいそうだベサ」

そんなこと言ったって、そのたんびに目をつぶっていたら私の職務はつとまらないから、余計な口出しはしないでくれ」

「お巡りさんぇ、この人たちは家サ帰っても食うものねェって言ってるベサ。したら死んでもエエのがネ。それにお巡りさん、おめェさんずいぶんころころ太っているんでねェが、なに食ってるんだべ。配給のものだけ食ってだら骨ど皮だけになって、立ってるだげでやっとだベサ。闇の米でもコッソリ食ってるんでねェベガ」

お巡りさんも、さすがにすぐには言葉が出なかった。さぁ、あとひと押しだ。

「お巡りさん、俺もこの間、シベリヤから復員して来たばかりだ。この人だぢの息子さんも、シベリヤで死ぬよりつらい苦労してるど思うョ。その息子さんのためにも許してやってケレ。お願いしますェ」

お巡りさんは、ウンともスンとも言わないので、

「しめた！」と思い、すかさず

「おじいちゃんもおばぁちゃんも、話のわがるお巡りさんでよがったネ。お巡りさんにお礼言って、早くリュックしょって帰ったほうがエエョ」

老夫婦は、私とお巡りさんにふかぶかと頭を下げて、そそくさと去って行った。

お巡りさんの方は憮然としている。

「お巡りさん、許してケレ」

心の中では、「おめぇさん、大したエエごとしたんだょ」

漁場の陸廻り

竹内　コト

浜の仕事はいろいろありますが、その中に『陸廻り』という大事な役目があり、個人的にも重要な仕事をしています。

鰊場では、まず朝早く起きて若い衆の出漁の準備や日和を見極めて、番屋での細かい仕事から家事一切を引き受けてこれに当たります。

特に夏場は、来春の支度に余念がありません。漁場の多くは自分の山を持っていましたから、その山へ行っては身欠きの結束に使うシナの木の皮をはいだり、山ブドウのつる、木の枝などを取ってきたり、農家からワラを買って来て、それを打ってつなぎつらやむしろ、かますを作ります。雨の日でも休む暇などありません。定廻りといって、番屋や倉庫を見廻って火

老いた両手をいたわりつつ

渡辺ハツエ

　背を丸めてチョコンと座った膝の上の両手、今までは気にもしなかったのに、どう見ても右手の方が左手より大きく見える。ゴツゴツと太く節くれだって、華奢でもなければ優しげでもない。私が思うに、右手は左手よりもこまめに動かすから、がっしりと丈夫そうになったのでは――と。でも左手の支えがなければ、右手は私の思い通りの行動はできない。両手が助け合って私を支えてくれているのです。

　この世に生をうけて七十余年、私と苦楽を共にしてくれたかけがえのない大切な両手なのです。

　思えば、娘の結婚式での花束贈呈のときの感激の涙、そしてまた、肉親を黄泉路へ旅立たせたときの悲しみの涙、そのつど、この両手は私の涙を優しく拭いてくれたのでした。いろいろな思いを秘めて、私と共に老いてしまったのです。

　今、改めてこの両手に感謝の念がわいてきました。私は今まで、いたわりもせず両手を酷使してきました。手は私に従順でした。私はこの手に、賞状や感謝状など一枚も持たせたことがないのです。これからももうないでしょう。

　このさき生命のある限り、両手の恩恵を被って行かなければなりません。老いた両手をいたわり大切にして、楽しく余生を送らせてもらいたいと思っております。

　十指みな宝に見える
　　　節くれ手

古平の地名《4》

▼「古平」と「赤平」

広く読まれている地名関係の本を見ると、どれも「古平と赤平はアイヌ語の語源が同じ」だと書いてある。どちらもアイヌ語では『フレーピラ』といい、古平の方は発音に近い漢字を当てはめて「古平」と書き、赤平の方では、フレ=赤いという意味から漢字で赤、ピラはその発音から平を当てはめた、というのである。地名からいえば兄弟同士というわけである。

　ところが、現在の赤平市でも昔からの「赤平」という地名について疑問をもち、いろいろと調べていることが分かった。

　その結論からいうと、「昔かアカピラという地名があった」ということである。アイヌの伝説の中に「アカピラ」という地名が出てきて、それが現在の赤平周辺にあるという。そうなると、古平とは地名の上で全く関係がなくなってしまうわけである。

「フレピラ・フルピラ」に近い発音から、「赤平」という漢字を当てはめた地名はかなりあるが、「古平」という地名は聞いたことがない。なぜだろう？

（前ページより続く）

の番もします。

　しかし、陸廻りの最も忙しく大事なのは大漁した時の人集めです。鰊が群来てくると浜は戦場のような騒ぎで、人の奪い合いになります。人手がないことにはせっかく獲った鰊も鮮度が落ち、腐らせてしまったのでは何にもなりません。ふだんからのつき合いや知り合いを廻り、とにかく走り回って人を集めるのが腕の見せどころです。ふだんだと鰊場でも五、六十銭の女の出面賃が、三倍、四倍になるときもあるのです。

　また、番屋には大きな炉がありますが、その炉砂を取り替えたり、電話の少ない時代でしたから連絡に走ったり、文書の配達など、本当に限りがない程でした。

　陸廻りといえば下役のように思われがちですが、よく気がつき体がまわり、親方の信用がないととても勤まらない役目なのです。漁場のことは、なんでも陸廻りさんに聞いた方が早いというのも分かります。

俳句

古平ホトトギス会

点滴をながめて暮す年の暮れ　越野スミ子

極月の外出叶わぬ病む身かな

山すその紅葉濃くなる万歩かな　越野敏雄

病む妻の禧願達磨を描く夜なべ

卒寿なお健康鮎を釣る手並み　水見句丈

手応えの大きく浜の鮭を釣る

入院の今日より夜長はじまりし　仲谷美砂

腰痛を訴ふ老いに梅雨ながし

生前に娘の植えし菊供へけり　大島喜恵

娘の忌日終えて炎暑の旅を解く

扉なき御堂に蜜柑(みかん)只ひとつ　福井幸平

成人式袴姿の男子(おのこ)かな

釧路まで長き航海星月夜(ほしつきよ)　大和田絵伊

古平に温泉が湧き天高し

初蝶やわれ先になり後になり　斉藤波留

積丹の海鳴り止まぬ冬の涛

卒寿ともダンスレッスンさわやかに　山口浪

切り張りは老いの手仕事障子張り

冬うらら雄冬沖航く巨船かな　仲谷比呂子

網すけそ抜く娘容赦なき霙

冬うらら雄冬全景浮びけり　福井久美子

対岸の雄冬嶺雪のきらめけり

積丹の紅葉となりて山深む　越野清治

結納の恙なくすみ温め酒

雪とけて久しぶりだネ土の顔　小学校三年　佐々木知世

さきに『古平の方言』ということで、町内の多くの方からいろいろとお聞きしました。年配の方にはきっと記憶にある、懐かしい言葉ではなかろうかと思います。

よくテレビドラマなどで方言が出てきますが、なんとなくしっくりしません。それは、言葉の使い方、つながりがどこか違うからではないでしょうか。あわせてその使い方の例もあげておきました。ご検討ください。

・あいでくせぇ＝相手に不足、ぜんぜん相手にならん
「おめぇなんか　あいでくせぇ！」
・あがかぐ＝舟の底の海水をくみ出す、小便をする
「おれ　あがかいでくるデ」
・あがとり＝敷布、シーツ
・あぐど＝かかと　「(歩いて)あぐどいでぇぐなった」

古平の方言

・あごわがれ（別れ）＝集団の解散、送別会
「(漁の終わり)今日おらだじの番屋のあごわがれだ」
・あずまし（い）＝ゆったり、気楽な
「(広くて)ずんぶ　あずまし家だな」
・あずらえる＝あつらえる、（ものを）頼んだ、物を持っていってもらう、人から預かったもの
「これ　おめサ　あずらえだど（ぞ）」
・あっぺだ＝あべこべだ、反対だ、裏返し
「あいつのシャツ、あっぺだど（ぞ）」
・あだする＝悪いことをする、仕返しをする
「カラスにあだされてカボチャまだつっつがれだ」
・あったら＝あんな、こんな
「あったら　ろぐでなし見だごどねぇ」

川柳

石井愛子

「せたかむい」昔語りの子守うた
人様に川柳を見たよと嬉しかり

渡辺ハツエ

ミスすれば世間は老いをボケにする
調子っ外れ孤独な老いの憂さ晴らし

北政道

一望館浮世の疲れ癒してる
不漁です海から答え聞こえない
じりじりと五％が押し寄せる
日記帳やはり三日でぺん止まる
あと三年老いには遠き来世紀